

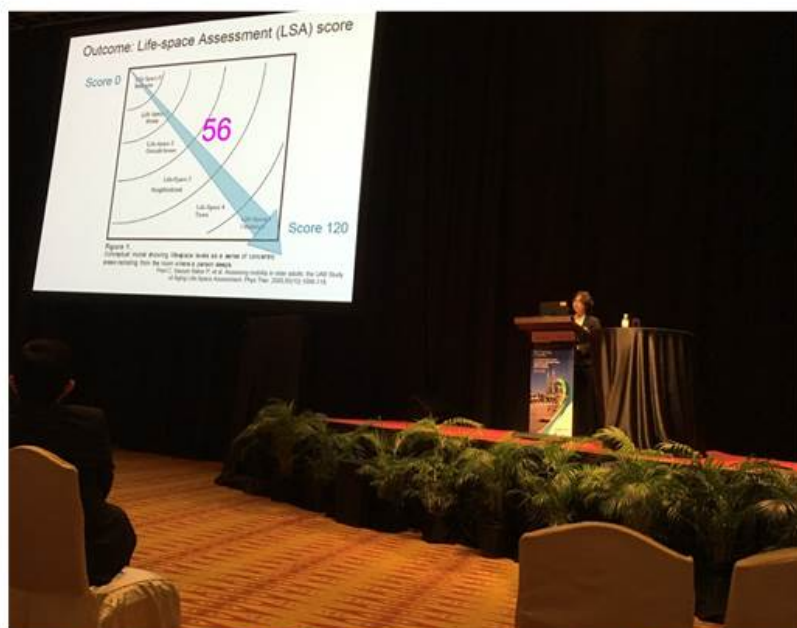
ISPRM 参加報告

10TH INTERNATIONAL SOCIETY
OF PHYSICAL & REHABILITATION
MEDICINE (ISPRM)
WORLD CONGRESS

今回初めてISPRM2016に参加し、2番目に大きな会場で口演をさせていただきました。大変ラッキーで、貴重な機会であったと思います。発表のタイトルは Predictors of Life-space Mobility at 6 Months after Discharge in Stroke Patients でした。

今回の発表は、横浜市脳卒中・神経脊椎センターの理学療法士さんがこつこつと取り溜めた、脳卒中患者の外来フォローのデータを解析した結果です。どこの国の参加者にきいても、「たくさんの症例のデータで「貴重」と言われました。職場である脳卒中・神経脊椎センターの同僚(とくにPTの横島さんと前野部長)および横浜市大医局の先生方の理解と協力なしにはできなかった研究で、本当に自由に解析・発表させていただいたことを感謝します。次はここで得られた機会を発表内容を論文化して臨床家の目に届き患者さんに役立てられるようにフィードバックしていきたいと思います。

中尾真理



第53回日本リハビリテーション医学会学術集会 印象記

平成28年6月9日より3日間京都で開催された第53回日本リハビリテーション医学会学術集会へ参加しました。会場である国立京都国際会館に到着し、まず参加受付のロビーで京都らしいおもてなし。青の背景に竹が揺れ、暑い日でしたが涼しい気持ちになってのスタートでした。



今回の学会テーマは「軌轍 Kitetsu と融和 Yuwa」。これまでに築かれてきたリハビリテーションに関する基本的知識と技能を改めて学ぶとともに、各臨床分野や多職種間での連携により枠組みを超えてリハビリテーション医学を発展させていこうという趣旨ということです。そのテーマどおり、リハビリテーションに関わる各科の先生はもちろん、歯科の先生の教育講演や、理学療法士、作業療法士、義肢装具士協会合同企画、

また華道の家元の講演！と多彩な内容でした。同時に並列で多くのセッションが開催されたため、どちらに参加するか迷ってしまう、というのが悩みでしたが、自分の興味のある小児のリハに関する教育講演を中心に拝聴しました。

信濃医療福祉センター朝貝芳美先生の脳性麻痺児におけるリハビリテーションの実際というテーマでの講演では、運動機能がプラトーになる時期までにいかに機能向上を図るか、積極的にアプローチされており、大変勉強になりました。安易に車椅子をゴールとするのではなく、装具を使って家庭でも立位歩行を取り入れることの重要性を改めて実感しました。

京都府立医大金郁喆先生の小児整形外科の治療とリハビリテーションというテーマでの講演では、内旋歩行児への足底板の効果、筋性斜頸術後の装具、ペルテス病での装具療法などを教えていただきました。今後の診療に直接役立ちそうな装具を紹介していただき、自分の診療に生かしてみたいと思いました。また、症例として紹介されていた、股関節固定術後に、仙腸関節の可動性によってROMを獲得しているという小児の症例では、人体の可能性の無限さ、また小児の発達は時に予想外の結果をもたらす、こちらの期待を裏切ってくれるということを実感しました。私も現在小児療育に携わらせてもらえる機会が増えたのですが、小児の発達は無限の可能性を秘めていることを改めて肝に銘じ、安易なゴール設定に陥らぬよう、自分を戒める機会となりました。



神戸大学酒井良忠先生の骨転移のリハビリテーションというテーマでの講演では、がんのリハをおこなう際には必ず骨転移の可能性を考えておくこと、また多職種での連携の重要性を学びました。

その他、イブニングセミナーでは加畑多文先生からTHAに関する基礎知識として、人工関節の種類、長所短所、また値段まで教えていただき、普段の臨床ではなかなか知ることのできない内容でした。

日々の診療では、目の前にある疑問を調べることで精一杯のことが多いのですが、学会に参加すると最先端の知識も知ることができ、また改めて勉強せねばと実感しました。今回の学会で学んだことを生かしながら、次回は自分でも報告できるようテーマを探したいと思いがらの学会参加でした。

横浜市立大学医学部 リハビリテーション科学教室 前島千恵

第 32 回日本義肢装具学会学術大会印象記

2016 年 10 月 15・16 日に札幌で開催された第 32 回日本義肢装具学会学術大会に参加しました。水落和也先生が大会長として主催した昨年の大会から、もう 1 年弱の時間が過ぎたことに驚いたこと、開催の札幌コンベンションセンターが、初期研修医で他科ローテートの折にポスター発表をした会場であり懐かしくも感じました。

大会長の野坂先生の講演：義足の構成要素の技術の進歩、主に大腿義足のソケットと膝継手を主眼においた講演から大会が始まりました。私は腫瘍用人工膝関節遅発感染による大腿切断に対する義足処方の経験という題名で口演しました。腫瘍用人工関節患者の、20 年以上経過した感染・切断の症例報告は少なく、短期間で義足歩行を獲得し社会復帰を果たしたという良好な経過を報告しました。同じセッションでは義足ユーザーの自転車歩行の獲得や、断端の硬さを定量化の研究など非常に興味深い取り組み



が多くみられました。症例報告でも臨場的な「take home message」を込めて発表することの重要性を改めて感じました。お忙しい中何度も予演会でご指導してくださった先生方に感謝を申し上げます。

今回大盛況であったのが、ソニーコンピューターサイエンス研究所の遠藤謙先生の特別講演、「身体とテクノロジーの未来～パラリンピックとサイバスロンを通じて」です。先生は最先端の工学技術を応用した義足で障害者が競い合うスポーツ大会での取り組みの紹介と、その活動を通じ、高齢化社会に見据えてリハビリテーション医療にも応用していきたいと語られておりました。実際に競技用義足の他に、モーターアシスト付きの長下肢装具を開発され、さらには障害者も健常者もともにスポーツ活動に参加

できる、新豊洲ランニングスタジアムを企画運営しているという、リハビリテーションの本質を実践されておりました。

横浜市立大学医学部リハビリテーション科学教室 浅野広大

第 11 回日本リハビリテーション医学会専門医会学術集会印象記

2016年10月29日、30日に金沢市で開催された第11回日本リハビリテーション医学会専門医会学術集会の報告をいたします。代表世話人は金沢大学の八幡徹太郎先生でした。

日本リハビリテーション医学会専門医会は学会専門医が集まって、日本リハビリテーション医学会を盛り上げていこうという趣旨の下に開催されてきました。本学会と異なるところは、学術発表を中心とするのではなく、いは専門医を目指す医師が学会で知識・高められるにすること、各地方の専門医で意見を交換することにあります。そのなところはSIG (Special Interest Group) ブスペンシャルティーとして専門的技術を様に、今回も数多くのSIGがハンズオンした。



専門医ある技術をよりが共に会し最も特徴的であり、サ高められるを行いました

私が幹事を務めているSIGおよびお手伝いをしたSIG、座長として参加したランチョンセミナーを順に話していきます。29日朝は痙縮SIGを開催しました。このところ3年間はボツリヌス治療とITB (髄注バクロフェン) 治療のハンズオンを開催しています。最初に藤田保健衛生大学の青柳先生が痙縮の原因、治療方法とボツリヌス治療について概説されました。その後私がITBによる痙縮治療について説明しました。その後は3グループに分かれて、上肢ボツリヌス治療、下肢ボツリヌス治療、ITBをそれぞれ15分ずつハンズオンとして回って頂きました。ボツリヌス治療ではエコーも用いて、施注筋の同定の仕方、治療のポイントなどを実践していただきました。ITBでは投与量の調節について概説した後に、リフィルの手技を実践していただきました。参加者の多くはまだ多くの治療経験がない先生方でしたので、今回の経験を基に地元でより多くの痙縮治療を行っていただければよいかと思いました。

29日昼にはボツリヌス治療に関するランチョンセミナーを東京慈恵会医科大学の原貴敏先生を講師にお招きして、私が座長で司会を務めさせていただき、お話ししていただきました。最近の治療のトレンドとエビデンスについて、慈恵医大の治療も交えながらお話し頂きました。昨年はお父さんの原寛美先生がランチョンセミナーの講師でしたので、親子二代が連続で講師をされるのはなかなか珍しいことだと思いました。原先生のお話は大変分かりやすく、今後の治療に参考になりました。

29日午後は脊髄障害SIGに参加しました。当医局では神奈川リハビリテーション病院の横山修先生がコアメンバーを務められています。私は介助犬のお手伝いをしており、当医局の先生で日本介助犬協会専務理事の高柳友子先生の代理としてブースで説明役を行いました。脊髄障害SIGのハンズオンは排尿障害、ロボット、自助具、介助犬のブースを参加者の希望に応じて、自由に回るシステムで行っていました。参加者はやや少なめでしたが、皆さん脊髄障害のリハビリテーションをさらに深めようとする意欲がある先生方ばかりで、参

加された先生は大変勉強になったのではないかと思います。また主催側も各ブースで交流を持つことができ、意見交換を図ることができました。

その後当医局で横浜市脳卒中・神経脊椎セン
子先生の専門医会研究助成金報告会がありま
究助成金は毎年専門医の中から応募を募り、優
である先生が受賞できるものです。高田先生ご
機能障害のリハビリテーションに関する量的
究を組み合わせた混合研究法による報告でし
者が少ないことがあり、症例数が少ないのが難
方法論と内容はすばらしく、今後症例数を増や
した形にしていければよい研究であると思ひ

29 日夕には意見交換会が盛大に開催され、
しい日本酒も出て、専門医会音楽グループの演
門医同士が大いに交流を図ることができまし
は RJN (Reha Joy Net) と回復期リハの会が開催され、私も参加し、大変楽しい夜を過ご
すことができました。

30 日朝は切断義肢 SIG を開催しました。今回は兵庫県リハビリテーションセンターの陳
隆明先生を中心として開発中のセミリジッドの下腿義足に関する SIG でした。リハ医だけ
ではなく、PT/PO にも参加してもらい、実演を含めた、切断患者に対する義足作製、リハ
ビリテーションについてのセッションでした。私はそれなりに義足には詳しいつもりですが、
兵庫リハの新しい方法は目からうろこでした。今後私たちの施設でも使えるようにしてい
きたいと思ひます。

30 日午後には市民公開講座も開かれ、大変盛大な学会でした。残念ながら専門医会学術
集会は今年で最後ですが、来年からは新たに秋季学術集会として開催されることになってい
ます。



ターの高田薫
した。この研
れた研究計画
専門の高次脳
研究と質的研
た。研究同意
点でしたが、
してきちんと
ました。

石川県のおい
奏もあり、専
た。二次会で

第40回日本高次脳機能障害学会印象記

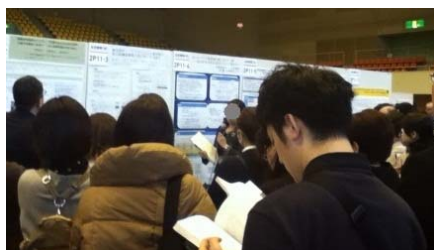
平成28年11月11日から12日の2日間にわたり、長野県松本市にされた第40回日本高次脳機能障害学会学術総会に参加しました。会ジ・オザワ 松本フェスティバルにおいてサイトウ・キネン・オーケ年のように演奏を行っているキッセイ文化ホール（長野県松本文化会の松本市総合体育館でした。比較的スペースに余裕はありましたが、加者が多いこともあって、テーマによっては立ち見が出るような口演ポスター会場はどこも熱気に包まれていました。天候にも恵まれた、気のある2日間となりました。

本学会は、リハビリテーション科、神経内科、精神科、脳神経外科だけでなく、言語聴覚士や心理士、作業療法士、ソーシャルワーカー職種が参加する多様性に富む学会です。元々が日本失語症学会から発展・変更した学会のため、失語症をはじめとする言語機能に関する演題発表が多いのですが、いわゆる行政的な高次脳機能障害に関する発表も増えています。今回は、「高次脳機能障害：社会的行動障害支援と展望」というシンポジウムが行われましたが、今回だけで結論が出るような簡単な問題ではありません。しかし、少なくとも、医療だけではなく多面的な支援が必要であることの確認はできました。



において開催場は、セイストラが毎館）とその隣まじめな参があり、また充実した活

などの医師など多くの



高次脳機能障害とは直接の関係はないかもしれませんが、特別講演としてベストセラーである「ゾウの時間ネズミの時間」の著者の本川達雄先生による「ゾウの時間・ネズミの時間・現代人の時間」という特別講演が行われました。動物、とくに現代人は莫大な量のエネルギーを消費することによって時間を速めているのではないかというお話には納得できるところがありました。環境の破壊が時間の環境も破壊し、社会生活のスピードに追いついていけない人間にとってストレスを与えているようです。高次脳機能障害のある患者にとってはより影響があるのだらうと思います。

脳の機能を突きつめていくという目的で、本学会においては場合によっては重箱の隅をつつくような議論をしている場面もみられます。しかし、その一方で社会復帰・職業復帰のためにはどうすればいいのかといった社会的なことも議論される幅の広い学会であり、われわれリハビリテーション科が果たす役割も大きいと考えます。次回は2017年12月15-16日に埼玉県大宮市で開催される予定となっています。

横浜市総合リハビリテーションセンター 高岡 徹